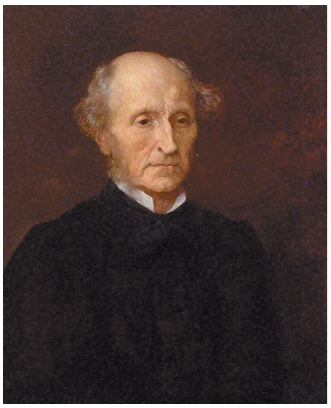
月刊 名大文学部

第 95 号
発行：名古屋大学文学部
広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp

教員コラム―No.93

つまらない哲学者としてのミルと私

鈴木 真（哲学）



私が哲学の教員だと自己紹介すると，多くの人は，何が研究テーマなのか，ではなくて，どの哲学者を研究しているのか，と聞いてきます。なので，J. S. ミルのヴィジョンを更新し展開することをしています，と答えます。すると，一般の人からは，誰その人，という反応を，哲学を学んだ人からは，なぜそんな（つまらない）哲学者を，という反応を，多くもらいます。特に日本の哲学のテキストではミルの扱いは小さいですし，彼が知られているのは功利主義―関係者全員の利益の総和を最大限に増やすことが正しい―という，「浅薄」と批判される立場のためだったりします。それに，ミルの他の割合知られた哲学的結論の多く―たとえば，経験科学の重視，個人の自由や民主主義の確立，男女平等の推進―は，良くも悪くも今の主流の考えに合致していて，常識をひっくり返す，という知的興奮からは遠く見えます。だから，上のような反応も仕方ないのでしょう。

でも一言いっておくと，たとえ浅薄に見えたとしても，皆の利益（幸福や不幸）への影響が大事だということは間違っていないと思うのです。ミルの他の多くの見解にしてもそうです。それに，こうした見解は今でこそ常識に近く見えるかもしれませんが，ミルが生きた 19 世紀には異論の多いものだったのです。たとえば，ミルが代議士となって女性に参政権を付与することを英国議会で初めて提起した時，彼は女々しい哲学者として散々揶揄されました。彼は功利主義と経験的事実に基づき，女性を男性と平等に扱わないことが不正であることを理詰めで主張した，名古屋大学の言う「勇気ある知識人」のモデルのような人なわけです。深くも刺激的でもないかもしれませんが，正しい結論に至ろうと，理屈と事実の命じるところに赴く哲学に私は共感を抱いています。

（J. S. Mill［画像左：老年期］は Harriet Taylor Mill［右］と共に自由や女性の平等を擁護した。）

分野・専門紹介―File30

言葉の世界を探検する

分野・専門名：言語学

人間は言語を使う動物であり，人間の複雑な思考は言語に基づいています。ですから，言語の仕組みを知ることで，人間が世界をどのように認識し，どのような思考を形成しているのかを知ることができます。

世界の言語は表面的にはそれぞれ異なっていますが，本質的には共通性をもっていると考えられます。言語学は，世界の諸言語を広く深く追及することによって，人間活動の基礎としての言語の本質的特徴を解明することを目標としています。

授業では，言語を分析するための基礎的な方法を学習します。授業で学べることは様々で，言語音の成り立ち（音韻論），語の成り立ち（形態論），

文の成り立ち（統語論），意味の成り立ち（意味論），談話や社会の中でのことばの使い分けの分析法（語用論，談話分析）や，言語の間の相違点や類似性を表す方法（対照言語学）などが学べます。まずは言語学概論で各論の基礎を学び，その後に受けたい授業を選択して受講します。

これらの授業は，テキストに沿って進められ，実際に分析の演習をし，発表をすることもあります。また，これらの方法を言語に具体的に適用することによって，多様性の中に均質性が認められることを実感するために，諸外国語も学びます。担当の先生方は，フィンランド語，日本語，フランス語，朝鮮・韓国語の他，様々な言語を専門としていらっしゃるため，それらの言語を学ぶことができます。また，よく知られた言語も，授業で学習することができます。言語学を学ぶと，身近だけれどとても奥深い，言語の魅力を感じることができます。また，物事を多様な視点から考える力が身につくことでしょう。　（小笠原 健介・学部４年）

分野・専門紹介―File31

白話（はくわ）文学への誘い―高校では学べない漢文の世界と魅力（「中国白話文学作品選読」）

分野・専門名：中国語中国文学

皆さんが漢文の授業で読んでいる詩文は，古代中国語の文語体である「文言（ぶんげん）」で書かれています。これに対して，民間の口語を反映させた文体を「白話」と言い，こちらは口語体であるがゆえに訓読にはなじみません。

白話的要素は，早くは孔子の言行録『論語』などに少し見られますが，白話自体が庶民のものとして軽視されていたため，漢代以降の文献にはあまり見られなくなりました。唐代に入ると，仏僧が庶民を教化するために用いた変文（仏教説話の語り物の台本）に白話が多く見られるようになります。そして宋・元代には雑劇の流行に伴って白話で記された台本が出現し，明代に至ると『三国志演義』や『水滸伝』などの白話小説が誕生して爆発的に流行しました。

写真は元代に刊行された『三国志平話（さんごくしへいわ）』という語り物の台本で，『三国志演義』のもとになったと言われている作品です。庶民向けらしく，俗字や略字，俗語がかなり多く，また史書の記録とはかけ離れた荒唐無稽な展開に溢れています。

大学の白話文学の授業では，学生一人一人がこのような原典資料と真っ向から向き合い，専門の辞書や関連文献，自らの語学力や調査能力を駆使して精読していきます。学生が自力で読み進めるのは至難の業ですが，中国人留学生からヒントをもらうなどして読めたときの喜びと達成感はひとしおです。

高校の授業では，日本古典文学としての漢文を，訓読法を用いて読むため，白話文学は扱われません。白話文学の原典資料を自ら読み，そこに特有の庶民の言葉や世界観という文言には無い面白さに触れることができるのは，大学の授業ならではの醍醐味と言えます。　（五藤　嵩也・博士前期課程２年）

最近の文学部

秋学期が始まります

閑散とした文学部棟にいると夏休みが永遠に続くような錯覚を起こしそうですが，１０月１日から新学期。研修，短期留学，インターンシップ，サークル，バイトや車校（？）で逞しくなった面々が戻ってくるのもあと少しです。（YK 記）

＊本紙では，名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが，それまで待てない人は…
名大文学部の WEB サイト　https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/　まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）